

奈良・山田寺跡

- 所在地 奈良県桜井市山田
- 2 調査期間 一九八一年（昭57）五月～一九八三年（昭58）一月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 対野 久
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 七世紀～十三世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査は東回廊を含む地域で、金堂の東の北区と塔の東の南区の二カ所に分けて行なった（第四次調査）。面積は六〇〇m²である。

北区で検出した主要な遺構は、七世紀代では、東回廊SC○六、回廊東側の南北堀SA五〇〇、基幹排水路の素掘南北溝SD五三〇と石組南北溝SD五三一、土壙、八世紀代では東西堀SA五〇五、土壙、瓦敷、平安時代のものでは掘立柱建物SB五〇一、瓦敷、南北溝SD五五二、土壙等がある。木簡は石組南北溝から二点、包含層中から一点出土した。

東回廊SC○六は三間分を検出したが、版築基壇と東側縁石、礎石のほか、地覆石や地覆の一部が残存し、その上に大量の瓦が堆積していた。

南北堀SA五〇〇は回廊の東約一七mの位置にあり、寺地の東部を仕切る施設の一つと考えられる。南北溝SD五三〇はSA五〇〇の東四・二mの位置にあり、幅一m、深さ〇・六mで、南流する。

石組南北溝SD五三一はSD五三〇の東半に重複しSD五三〇の堆積層を掘りこんで作られており、南流する。幅〇・九m、深さ〇・二mで、東側壁は玉石を二～三段に積み、西壁は一段だけ積んでいる。堆積層は上下二層に分かれ、七世紀中頃から八世紀前半の土器が出土し、加工木片屑も多く含まれていた。木簡は上下各層から一点ずつ出土したが、上層出土のものは墨痕のみの断片である。両溝の関係は、まずSD五三〇が七世紀中頃に作られ、七世紀後半にSD五三一につけ替えられ、八世紀中頃には、SD五三一も埋没したものと考えられる。

東西掘立柱堀SA五〇五は北区調査区南端にありSA五〇〇のすぐ東から調査区東端まで一三間分を検出した。重複の状況からSD五三一より新しい。またSA五〇五を西へ伸ばすと金堂心とほぼ一致するので、寺域の東半部を南北に一分する施設と推定される。

掘立柱建物SB五〇一は調査区東半部にある一間×二間以上の東西棟である。南北溝SD五五二は回廊のすぐ東にある素掘溝である。他の木簡一点は、SD五三一の東側北方で、平安時代後期から鎌倉時代にかけての土器を含む、回廊倒壊後の土層中から出土した。

南区では東回廊二間分を検出したが、回廊建物の東側柱列そのも

のが西方へ倒壊したままの状態で残存しており、多くの部材や壁などを検出した。倒壊の時期は出土土器から一〇世紀末と推定される。

8 木簡の釈文・内容

石組溝SD531



(1)は側面に僅かに墨痕がみえるが、墨書のある厚板を割って木簡を作製したのか、側面に偶然墨がついたのか判断できない。負磚は正倉院文書等によると背負って運べる形のカメのようで、酒を入れた例がある。

(2)の寺名は残画からみると山田寺や浄土寺にはならないようである。経論司は経蔵の出納管理をする職掌をいうのであろう。

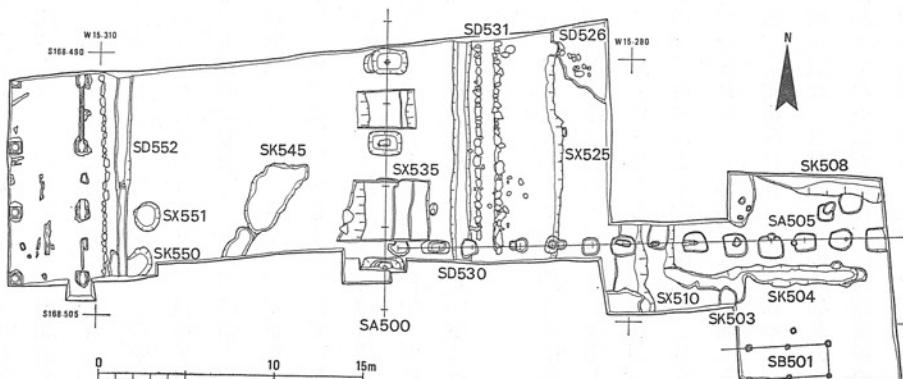
9 関係文献

奈良国立文化財研究所『飛鳥藤原宮発掘調査出土木簡概報(上)』

(一九八三年)

同『飛鳥・藤原宮発掘調査概報13』(一九八三年)

(加藤 優)



山田寺第4次調査地北区遺構配置図